

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：32607

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463514

研究課題名(和文) 母親となる自己像の形成に向けた対処に関する研究

研究課題名(英文) The Study on coping pattern in the maternal adaptation -Focus on reconfiguration of becoming a mother-

研究代表者

島袋 香子 (SIMABUKURO, KYOKO)

北里大学・看護学部・教授

研究者番号：70206184

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：妊娠期における母親となる自己の再構成に対する対処を明らかにする目的で、妊娠後期の初妊婦を対象に本研究を行なった。妊婦の対処特性は責任受容型が低く、社会探索型が高い特徴が示された。母親役割の同一化(J-PSEQ)の平均値により三群比較したが、どの群も母親となる精神的準備を進めており、三群の違いは進行度の違いであると考えられた。夫との関係は先行研究同様、影響要因であることが確認された。

本研究から、妊婦は母親になることに対処し、母親となる自己を再構成しているが、その進行の度合いは、影響要因と関連し、それぞれ異なること、各測定尺度の結果は測定時点における妊婦の対処状況を示していることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The study aimed to clarify how pregnant women prepare to be mothers. Using three scales (SCI, J-PSEQ, and the maternal attachment scale), and two interviews were conducted involving 15 primiparae in the last trimester of pregnancy. For analyses, the subjects were divided into three groups (by maternal role identification of J-PSEQ.) The results were as follows: 1)SCI: The poorly-prepared group showed a higher score only for the avoidance type, and showed lower scores for all the other items. The score for the social-support-seeking type was similar among the three groups. 2) J-PSREQ: The poorly-prepared group showed a higher negative score for their relationship with their husbands. 3) The maternal attachment: The poorly-prepared group showed a lower score for the antagonistic index. 4) The interview results: pregnant women prepared themselves as mothers. We suggest that the results of using each scale represent pregnant women's current coping situation.

研究分野：医歯薬学

キーワード：母親役割 適応過程 母親像形成

1. 研究開始当初の背景

女性は妊娠中に母親となる精神的準備を行なう。しかし妊娠は、社会で活躍する現代女性にとって人生の岐路にたつ問題である。厚生労働省の調査(2003年)において、30歳以上の初産婦(212名)は子どもを持つことが不安(90名42.5%)、子育てにかかわりたくなかった(37名17.5%)と回答し、全対象者の出産後の悩みは仕事や自分の時間が取れない(87.7~93.4%)であったと報告されている。従って現代女性の妊娠に対するアンビバレントな感情は複雑で緊張が強いことが推測される。

研究者は、女性の母親となることへの対処状況を明らかにし、妊娠期の看護ケアを検討する目的で研究に取り組んできた。研究においては、母親役割の同一化と妊婦の対処特性、母親や夫との関係、対児感情との関連を明らかにした。しかしこの結果は、対処の結果を示すと考え、研究では、対処のプロセスを明らかにするため面接調査を加えた分析を行なった。その結果、多くの妊婦は母親となることに対処しているが、それは意識的対処とはなっていないこと、自分なりの母親像を描こうとする妊婦ほど現実的対処に向かっており、「サポートを得られる確信」が影響していることが示唆された。母親となることへの対処がすすまぬ状況は、出産後に対応困難な状況を産むことが考えられ、この状況をさらに解明することが必要だと考え、本研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

女性の母親となる精神的適応過程は、自分なりの母親像を形成する過程であると捉え、妊娠期における母親となる自己の再構成に対する対処(自己調整)を明らかにする。

3. 研究の方法

妊娠後期の初妊婦を対象に測定尺度を用いた調査と2回の面接調査を行なった。

(1) 測定尺度

Stress Coping Inventory(SCI)

2つのストラテジーと8つの対処型で構成されており、妊婦の対処特性を確認する目的で使用した。

対児感情評定尺度児への接近感情、回避感情、拮抗感情を測定する目的で使用した。

Japanese Prenatal

Self-Evaluation(J-PSEQ)

評価点が高いほど心理社会的適応が悪い。7つの下尺度があるが、研究で関連がみられなかったものを除外し、妊娠の受容、母親役割同一化、出産準備、実母との関係、夫との関係の5つの下位尺度を使用した。

(2) 面接調査

2回の面接調査を行なった。母親役割の同一化に焦点をあて1回目からの変化に着目した。面接時間は30分~60分である。調査は、北里大学看護学部研究倫理委員会及び調査施設の倫理委員会の承認を得た。

(3) 分析方法

対象特性を確認するため、研究及び研究の結果と比較検討した。次に母親役割への精神的準備状況を確認するため、J-PSEQ 母親役割の同一化の平均値 20 ± 2 点を分岐の幅として、母親役割準備高群5名、中群7名、低群3名による三群に分類し、各項目の中央値を指標に比較検討した。

面接調査の結果は三群別に質的帰納的に分析し、1回目と2回目の結果を比較検討した。分析にあたっては専門家によるスーパーバイズを受けて整理した。

4. 研究成果

(1) 対象の概要

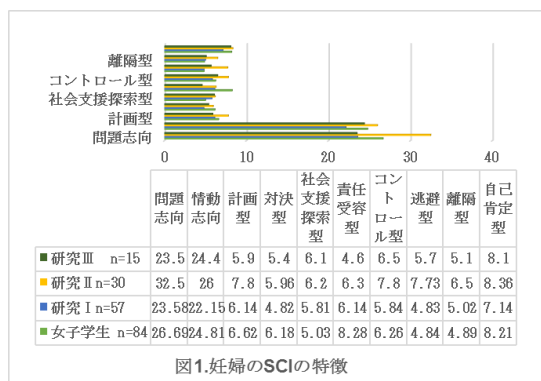
研究協力を承諾し2回の面接調査ができた者15名を対象とした。対象妊婦の平均年齢は32才であった。面接調査は1

回目が妊娠 30 週～31 週、2 回目が妊娠 33 週から 34 週の時期に行なった。

(2) 対象の特性

妊婦の SCI

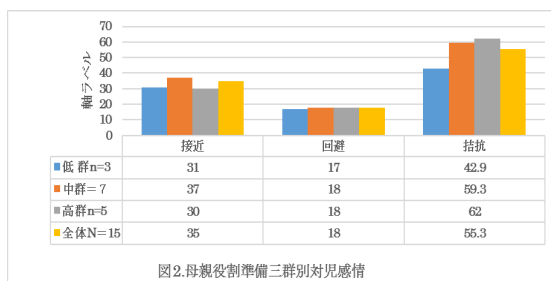
対象妊婦の SCI は、女子学生の SCI と比較し、責任受容型と対決型が低く、社会支援探索型が高い値を示し、研究 及び研究 同様の結果を示した。妊娠した女性は内向的で受容的になる特徴があり、この結果は妊婦の対処状況の特徴を示していると考えられる(図 1)。



(3) 母親役割準備三群(高・中・低) 別による比較

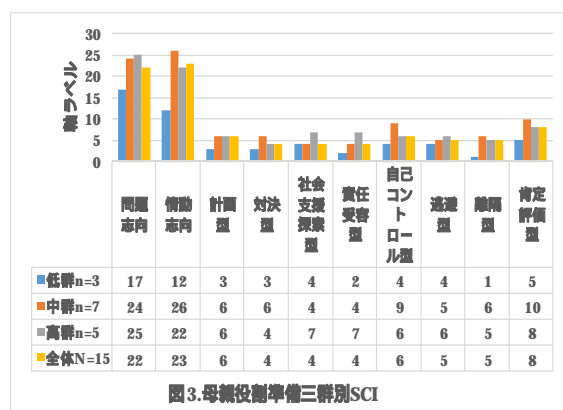
対児感情

接近感情は中群が最も高く、回避感情は差が無く、拮抗指数は低群が最も低い値を示した。妊婦は母親役割を受け入れていく中でアンビバレントな感情を持つといわれており、中群・高群の拮抗指数が高いのは母親となることへ精神的準備が進められていること示していると考えられる(図 2)。



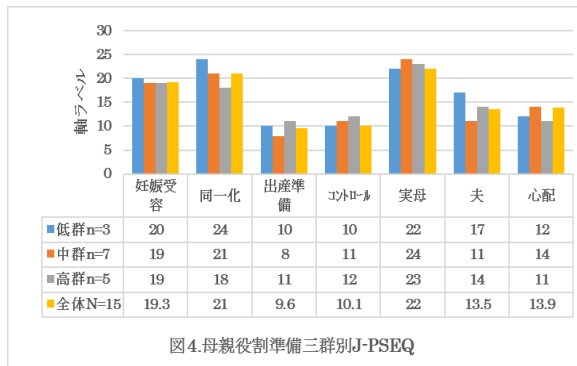
SCI

低群は、他二群と比較し、対処に用いたエネルギー値が低く、社会支援探索型のみ同等で、他は全て低い傾向を示した。中群は、対決型、自己コントロール型、肯定評価型が他二群より高い値を示しており、母親となる精神的準備に向けた対処が進められていることが推測された。高群は、社会支援探索型と責任受容型が他二群に比べ高い値を示しており、より現実的な対処へ移行していることが推測された(図 3)。



J-PSEQ

低群は、他二群と比較し、夫との関係に対する否定値が高い値を示した。中群は他二群と比較し、出産準備に対する否定値が低く、児に対する心配が高い傾向を示した。研究者が行なったこれまでの研究では、実母との関係と夫との関係が影響要因として上げられており、本研究においても夫との関係が影響していることが示された。中群は、他二群より母親となることに対する心理的状況が動いておりそのことが出産準備や児に対する心配の項目で表現されたと推測する(図 4)。



(4) 母親となる自己の再構成

面接データのカテゴリー数

カテゴリー数は、1回目が、高群(主カテゴリー4、サブカテゴリー7、ラベル19)、中群(主カテゴリー6、サブカテゴリー12、ラベル29)低群(主カテゴリー4、サブカテゴリー7、ラベル17)であり、2回目が、高群(主カテゴリー7、サブカテゴリー14、ラベル29)、中群(主カテゴリー4、サブカテゴリー13、ラベル34)低群(主カテゴリー3、サブカテゴリー5、ラベル12)であった。

面接データによる母親となる自己の再構成

三群における面接データの特徴をみると、高群は、母親となることに対し1回目では「いづれはたどりつく」と【ゆったり過ごす】構えであったのが、2回は「気持ちが決まる」と【先を見て進む】状況となり【子育ての対策を練る】【頼る時を判断する】と現実的対処に変化していた。

中群は、「親として準備する」「母親を見本とする」と1回目から母親となる精神的準備状況を表現し、2回目では「親になる意識が高まる」「自分のやり方でいく」と精神的準備を自ら進めて行く状況に進んでいた。

低群は、「なんとなくかなと思う」「自分は感覚的だ」とする【考えない】状況の者と【現実を知ってハットした】ことから「親になるから考える」と表現した者が混在し

ていたが、2回目では「やっと他の人と並べた」「出産・育児への心構えが進む」【役割変化を意識する】発言や「実母とは違う母親を目指す」「穏やかな母親になりたい」と自己の母親像に関する発言がみられ、精神的準備が始められた状況が示された(表2)。

表2.面接データのカテゴリー化

| | 1回目 | 2回目 |
|-----------|--------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 低群 n=3 | 何とかなる 現実にはとつする 実母の考えを受けとめる みんなの支援に気づく | 自分は遅れている やっと(みんなに)並べた 実母とはちがう自分を目指す |
| 中群 n=7 | 自分のペースで行く 周りに頼る 実母を見本にする 親として準備する 夫の支援がある 周りに気を配る | 自分のやり方で行く これからの期待が増す 親になる意識が高まる 夫の支援に対し確信がある |
| 高群 n=5 | ゆったり過ごす 子育てにポリシーがある 自分が持っている力を知っている 知識をしっかりと身につける | 先をみて進む 命への責任を負う 子育て対策を練る 親を頼る 頼る時を判断する 夫の気遣い 母親としての子への思い |

まとめ

本研究から、妊婦は母親になることに対し、母親となる自己を再構成しているが、その進行の度合いはそれぞれ異なること、各測定尺度の結果は測定時点における妊婦の対処状況を示していることが示唆された。

また、研究 1・研究 2 と同様、夫との関係が母親となる対処に影響することが確認された。さらに、研究 3 においては、自己の母親像に対し、「なってみないとわからない」と表現した妊婦が多かったが、2 回の面接を行った今回の調査では、実母との比較や自己の対処特性から、母親になることに対処している様子が表現された。したがって、母親となる精神的準備を意識的に進めるための支援として「語る機会」を持つことが重要であることが示唆された。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

村井佐知子, 島袋香子

妊婦の母親像形成に向けた対処に関する研究 - 初妊婦を対象として -

第 57 回日本母性衛生学会, 2016 年 10 月 15 日, 品川プリンスホテル(東京都, 港区)

〔図書〕(計 0 件)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

島袋 香子 (SHIMABUKURO KYOKO)

北里大学・看護学部・教授

研究者番号：70206184

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

新井 陽子 (ARAI YOKO)

北里大学・看護学部・准教授

研究者番号：90453505

(4) 研究協力者

村井 佐知子 (MURAI SACHIKO)